海からの眺望

――地域世界からみたベトナム北部海岸――

リ・タ ナ 著
中砂 明徳 譯

はじめに
一　海南島と泉州
二　雲屯（ヴァンドン）とハイズオン
三　チャンパ攻略とその遺産
四　民族地圖の書き換え
五　「商業の時代」のもう一つのエピソード？

はじめに

ベトナムの歴史記述で興味深いのは、海岸部が領土のほぼ三分の一を占めているのに、東南アジア大陸部諸國の中で、内陸にあるラオスに次いで陸地に強固な存立基盤を有する政體であると、歴史家が見なしてきたことである。(1) このような視點によれば、ベトナムは、自給自足あるいは農村市場でごく單純な取引が行われるだけで、山とも海ともほとんどつながりを持たない平原部の自立的村落の集合體であり、このような立地には儒教が適合的である、というより儒教が農業社

會に溶け込んで社會を統合する役割を果たしていた、ということになる。そして、國家と資本主義という「外來の異質の力」がこの自己完結的な世界の基底を掘り崩し、その生活様式と精神を破壞して舊世界を混亂させ、機能不全に陷れた、というのが從來の理解である。

本稿ではベトナム北部海岸の歴史において特異な二つのエピソードに注目することによって、こうした傳統的な史觀を再檢討する。まず、十二～十五世紀のトンキン灣に存在した交易圈の再構成を試みる。この交易圈における商業こそが初期ベトナム國家の基礎の重要な部分を形作ったのである。次に、十七～十九世紀の中國―日本―ベトナムの書籍交易の問題を取り上げたい。十八世紀後半のシャム灣の海上交易を檢討した近作[2]同様、私は本稿においても、北から南へと連鎖する「ベトナム的」村落において畫一的な農民生活が營まれたとする、「傳統的な」ベトナムのイメージに挑戰している。そして、ベトナムの過去を形作ってきた歴史的文脈の變化を明らかにし、この「大きなS」（ベトナムの形狀を示す）が隣人との關係の中で形づくられてきた過程を觀察し、ベトナムをより廣い地域空間の一部として正しく位置づけてみたい。そのために、本稿ではベトナム史を海から眺めてゆく。陸に視野を限定している時には見えなかった眺望が得られるはずである。

一　海南島と泉州

トンキン灣は唐代に中國と東南アジアを結ぶ幹線ルートからはずれたかのように見え、以後は商業の主要な中心とは考えられていない。しかし、十二～十五世紀にかけて、この南シナ海の靜かな一角はまったく別の物語を紡ぎ出していたかも知れないのである。各書に散在し、一見するとバラバラな史料を繫ぎ合わせると、海南島の西岸諸港と廣西、そして大越、チャンパの諸港を結ぶ、活氣ある商業圈の姿が見えてくる。これは、單にトンキン灣に局限された內向きの地域市場ではない。逆に、この商業圈は東南アジア半島部、中東のムスリム市場と連結することによって、大越の主要產業である

製陶業の生命線となっていたというのが私の論點であるが、この構圖を檢證するために、まず種々の情報を繫ぎ合わせてみよう。

海の方からトンキン灣（あるいは「交趾洋」）を眺めてまず氣附くことは、この地域が早くから海南島と交渉をもっていたことである。多くの中國史料が「沈香は交趾に產する」と記すが、交趾を有名にした沈香の多くは實は海南島やチャンパの產品であった。たとえば、海南の主神「黎母（黎族の母神）」について次のような記述がある。(3)

彼女は山の果物を食べて、林木に住みついた。月日が流れて、交趾から蠻人が海を越えて沈香を集めにやってきた。彼は彼女と結婚し、多くの子孫を作った。それから土地が開け、食糧が作られた。

彼女の故鄉、黎母山が最上質の沈香の產地であることを考え合わせると、この地方傳承は興味深いものとなる。(4) 交趾の沈香がどこから來たかを示すだけでなく、交趾と海南の間に密接な關係があったことを表している話なのである。交趾の人が沈香を集めに海南を訪れていたことを示す史料は他にもある。(5) 交趾の沈香供給の相當部分は海南人との交易に仰いでいたのである。『諸蕃志』には、黎族は「香木の交易で生計を立てていた」とある。(6) したがって、黎母の話に見える採集者の中には、沈香の取引のために海南にやってきたベト族が含まれていたと考えられる。

香木は交趾の重要な輸出品として欽州に持ち込まれ、はるばる四川からやってきた商人が携行した絹と交換されている。(7) 交趾の日常品の供給はすべて欽州に仰いでおり、兩地の間を舟が始終行き交う。博易場は郊外の江東驛にある。少量の米や綿布と交換するために海產物をもってくる者を「交趾蜑」という（廣東の蜑と同系）。その國の富商で取引にやってくるものは、必ずその邊境の永安州から欽州に移牒する。これを「小綱」と呼ぶ。交趾の宮廷の使者が欽州にやってきて取引する者を「大綱」という。彼等がもたらすのは、金、銀、銅錢、沈香、諸種の香木、眞珠、象齒、犀角である。わが方の小賣商人は紙筆、米、布を交趾の人々と交換するが、言うに足るものはない。しかし、富商が年に一度蜀から錦を欽州に賣りに來て、香と易えて蜀にもどる。その取引は數千貫に及ぶことがある。これらの商人たち

は商談成立まで何時間も價格について話し合う。決まった後に他の商人と交渉することは許されない。商談が始まった時點では、兩方の提示價格に天地の開きがあることがしばしばである。わが富商は手代を遣わして小商いで自給を圖り、時には假寓を建ててそこに滯在し、相手をじらしにかかる。彼の富商も動じず、持久の計でわが方を苦しめる。雙方が出あうと、いっしょに飲み、やがて仲良くなる。仲買人が値段を調整し、雙方の提示價格が接近してくる。〔交渉が成立すると、市場の〕役人が香の重さを量り、錦を渡して、完了となる。〔宋の〕役人はわが方の商人にしか課税しない。

十三世紀の記録『諸蕃志』には交趾は「通商せず」と記されてはいるが、この記事を見ると、交趾はトンキン灣の沿岸交易における主要な參加者であり、この地域の交易が盛んで入り組んだ構造を有していたことが分かる。この交易は廣域的なものとも考えられるし、舟行すればさしたる距離でないことを考えればローカルなものと見ることもできる。いずれにせよ、交易がこの地域の人々の暮らしの重要な部分を成していたのは間違いない。

大越を海南・チャンパの雙方と結びつけていた海上交易のいまひとつの門戸はゲアン、ハティンの諸港である。たとえば、ズィエンチャウ地方（現在のゲアン省の北東角）はチュオンソン山脈（ベトナムとラオス・カンボジアの國境をなす）やメコン川中流域、そして南シナ海やトンキン灣と古くから連絡していた。[9] しかし、海南と外界との關係でもっとも重要なのは、チャンパである。宋代以降、チャンパの使節は大陸に赴く前にしばしば海南に立ち寄った。明代は尙のことそうである。[10] 海南で活動する商人はチャンパから、あるいはチャンパ經由でやってくるのが通例だった。ムスリム商人が據點を有していたチャンパは、長大な交易網の一環をなしていた。[11] チャンパのムスリム商人は廣州・福建では「蕃坊」に居住しており、[12] 海南では主に崖州にいた。[13] 他の外國人――やはりその多くはチャンパから來たのだろうが――は現在の儋縣（海南島北西部）、白沙（中西部）にあたる地域に住んでいて、その多くは蒲姓（Abu）であった。[14]

蒲氏の系圖は、海南・インドシナ・中國大陸部を結ぶ線を跡づける手がかりを提供するものであり、海南（崖州）、福

建（德化）、廣東（廣州）、そして廣西の欽州で見つかっている。[15] 換言すれば、蒲氏はその交易據點があった地域に分布して住み着き、トンキン灣周邊はそうした集住地の一つだったのである。マンガンが指摘するように、蒲氏のムスリム起源説には近年疑義が呈されているが、「八世紀以來、チャンパ、南シナ海のムスリム商人のコロニーと蒲氏の間に關係があった」[16] ことは、中國・アラブ史料からみて疑いようがない。このように、海南のムスリムの存在、その泉州との關係は福建の商業の興隆に大きく寄與していたのであり、それは張彬村も指摘するところである。[17] チャンパから來た商人は海南島を足場または中繼點として大陸諸港に向かい、そこで一定の影響力を持っていたし、他のイスラームのコミュニティや福建人と競合・協力兩様の密接な關係を取り結んでいた、と考えるのが理にかなっているし、プタクもそうした見解をとっている。[18]

海南とチャンパの密接な關係については、十七世紀の中國人史家の記錄があるが、有名なベトナムの史家黎貴惇の注目するところでもあった。次の引用は彼の海域への關心を示している。

> 屈大均は〔『廣東新語』において〕、「崖州の南六百里にチャンパがある。南風が吹くと、チャンパの鷄の聲が大きい鐘の音さながらに、海外から屆く。それほどに兩地は近い。瓊・崖が廣東の屏障となっているように、チャンパも瓊・崖の屏障となっている」。[19]

黎貴惇にとって、この地域全體は海を介してつながり、貿易風の影響を受けた一まとまりの空間であって、國境はほとんど意味を持たなかった。ここで重要なのは、「中國」を一つの堅固なブロックとみなして、その文明が周圍に普及し、北方からベトナムに影響を與えたというよりもむしろ、明代に至るまで（雲南については十八世紀半ばまで）、廣東・廣西・雲南・海南の大半はトンキン地域よりも低開發であったということである。この點で、陶磁器生産が有用な參考材料になる。今日のハイズオンやタインホアには、十三世紀までにすでに有名な產地がいくつか成立していたが、同じ頃廣西にはひとつの窯跡しか確認されず、雲南にいたっては皆無である。[20] 唐代の交趾、廣西、雲南、海南の科擧登第者を調べれば、中國

化の程度と物質文化のレベルにおける交趾と近隣地域との比較ができるだろう。十二世紀の『嶺外代答』には、「交趾の人々は金坑の利で〔廣西の〕わが民を奴隷として買っている」とある。[21] 海南島がチャンパの馬の主要な供給元だったことはよく知られているが、當時のチャンパは「農業的基盤も有する、高度に國際的な交易權力」[22]だった。東南アジアは「商業の時代」（アンソニー・リード）において、中國への一次產品の主要な供給源であったが、それよりずっと以前に、海南は大越・チャンパに對して同じ役割を果たしていたのである。漢族文化が北からベトナムに影響を及ぼしたというより、中國化された國際的なベト族地域が漢族文化の據點となって、雲南や廣西に影響を與えたというべきであろう。

こうしてみると、ムスリム商人が千年に及ぶトンキン灣での活動の中で、欽州・海南・チャンパに足跡を記していながら、大越を素通りしていたとは考えにくい。しかし、現存の史料を見る限り、大越での活動への言及はほとんどない。ウィットモアやホールが論じたように、北部都市に對する言及は後世の儒者史家の偏見に染め上げられており、とくに交易は胡亂なものと見られている。[23] こうした狀況では、ムスリムのネットワークが存在したとしても、儒者史家の二重の熱意によってかき消されてしまうであろう。なぜなら、その存在はイデオロギー・人種的に正統なナショナル・ストーリーの構築に混亂と不一致をもたらすからである。こうして抹消された場所・アイデンティティ・コミュニティの痕跡を復原するには、さらなる探求が必要になる。

二　雲屯（ヴァンドン）とハイズオン

こうしてみると、陳朝や黎朝初期の大越の主要港として、雲屯（ヴァンドン）が選ばれたのが偶然でないのは明らかである。私にはこれまで、王朝の中心から遠く離れた雲屯が選ばれた理由が分からなかった。一見すると、この立地條件は貿易をできるだけ首都から隔離しておきたいという王朝の志向の表れであり、貿易は經濟の中核では決してなかったという見解を支持するかのようである。しかし、十五世紀まで首都と中國海岸を結ぶ主要水路がバックダン川（白藤江、紅河

のかつての主流。現在の主流はナムディンとタイビンの間を流れる[24]だったことを想起すれば、雲屯はまさに當時の主要交通路に位置し、後世よりも中國の海岸部にずっと近かったことに氣附かされる。雲屯は宋代に起きた中國最初の「商業革命」[25]時代に生まれ、福建・チャム・ムスリム商人が足繁く訪れた海南と欽州の間に介在するトンキン灣の心臓部に位していた。さらに、福建のムスリム税關吏や商人に對する元朝の優遇政策が、このムスリム主導の交易圏の繁榮を助長したに違いない。

當時の大越の陶磁器の主要生産地を考慮に入れれば、こうした交易圏の存在がはっきりしてくる。櫻井由躬雄によれば、一二〇〇年から一三四〇年の間に大越の人口は二倍になっており、[26]當然手工業生産の刺激となったであろう。陶磁器は清化や天長府（後出）など各地で生産された。一二五〇年以降、いくつかの民窯が現在のハイズオン地方に現れ、精巧な中國風陶磁器を作っており、より高い生産段階に入ったことを示している。また、多くの民窯址が雲屯から水路でわずかな距離にあるチューダウ地方で見つかっている。この生産の誘因となったのがチャンパのムスリム市場の存在であり、十四世紀の生産の高潮がチャンパの繁榮期と符合していることは注目に値する。大越の染付が西アジア市場で活動する商人の求めに應じて生産されていたことを示す證據があるし、最上級の豪華品は遠くペルシア・エジプト・トルコにまで輸出されていた。[27]また、ベトナム陶器はより近いムスリム地帯であるスラウェシやフィリピン中・南部でも見つかっている。[28]これらの場所でゴーサイン（現ビンディン省）のチャンパ陶器も見つかっているのは興味深い。[29]

海外販路向けに陶磁が製作されていたことは、その生産が廣域市場に組み込まれていた明證である。東ジャワ各地でマジャパイト宮廷が注文した仕様にあわせて作られた様々な形の施釉タイルが見つかっているが、[30]粘土と施釉法からみてハイズオン製であると考えられている。[31]一九九五年に南フィリピン沖で引き上げられた沈船（一四七〇～八〇年代に難破したと推定される）から見つかったベトナム陶器の中にガラスのビーズや青銅の指輪（いずれもベトナムの産品ではない）が入っていたことは、東南アジアの多角交易における物産複合の形を示していて興味深い。[32]ウェイドが實證したチャンパとフィ

リピン間の交流もまた、チャンパのムスリム交易地圖のジグソー・パズルにピースを一つはめ込むものである。[33]

こうした海からの眺望によって、長らく知られてはいたが相互の關係がはっきりしなかったいくつかの事實に新たな照明をあてることができる。とりわけ、ハイズオンの手工業の問題はこの視點により解答の糸口が與えられる。ハノイで有名な「三十六坊」の工藝品を扱う人々――建築家、大工、染物師、革靴職人、彫版師[34]や、銅通り（ハンドン）や銀通り（ハンバック）[35]の銅・銀細工業者――の多くの祖籍はハイズオンにあった。あるハノイの金細工師の家がやはりハイズオンの出であることが最近明らかになった。[36]こうした種々の事例はハイズオンに長い手工業品の取引・生産の傳統があり、それはおそらくハノイよりも古いだろうことを示している。じっさい、すでに十三世紀には菅笠の生産で知られていたが、これは十八世紀に有名になるフエの菅笠に先行するものであった。[37]

これらの諸産業は、職人がかかわった業種の單なるリストなのではない。それぞれの産業に數千の勞働者が雇用されていたはずである。たとえば、製陶業はきわめて勞働集約的であり、茶碗一つ仕上げるのに多くの手を經る。[38]製瓦業はそれほど複雜ではないがやはり同樣であり、職人のほかに、燃料の薪を集め、常時粘土を掘り加工する勞働者を必要とする。[39]雲屯だけで、陳朝期の寺址が七つあるが、その建築資材は相當量に上ったはずである。[40]ハイズオンの手工業に間接的に關わった人々――たとえば、陸水運、建設、食品加工など――の數はかなりのものだったに違いない。[41]これが、桃木至朗のいう「民間の大量消費市場の興起」[42]の基礎となった。したがって、ハイズオンの製陶業は、少數の農村で營まれた孤立した産業として忽然と出現したものではない。中國の多くの商業センター同樣、地域内の他の産業――上述のものに加えて、造船・綿織物・製鹽など――とあい携えて繁榮した特化産業なのである。岸本美緒が中國について「輸出産業は經濟活動全體に占める割合だけで單純に評價されるべきではない」[43]と指摘したことは、大越にもあてはまる。外國貿易が經濟構造に及ぼした影響は、むしろ質的に分析されねばならない。

十三世紀後半の大越の佛教の中心である安子山がウオンビー（ハイフォンの東北にあり、海に近い）にあることを考えると

さらに面白い。ここは陳仁宗（在位一二七九―九三）が有名な臨濟禪竹林派を開いたところで、この交易圏のまさに中核に位置している。[44] 有名な瓊林寺も高僧法螺によってやはりこの地域に開基された。彼は生涯の間に千三百もの青銅佛を作ったとされている。[45] こうした事業には巨財が投じられたであろうし、銅の使用量も、大越が銅を產しないことを考えればめざましいものがある。

この地域は百五十年以上もの間、陳朝の實質的な政治の中心でもあった。陳朝の歷代の君主は繰り返し、その家が「海岸より興った」と主張している。[46] 一二三九年以後、天長府の家鄕（今日のナムディンの近く。ハノイよりずっと海に近い）に宮殿群を建造している。一世紀後のアユタヤ同樣、この政治中樞は「潮水がまちを圍み、岸邊の花木の香氣が人を襲い、畫舫が往來し、仙境のようであった」。[47] 陳朝の君主は昇龍（ハノイ）よりも天長の宮殿に滯在することが多く、この地が實質上の首都であった。

政治・宗敎・交易の中心が隣接して群を成し、製陶業の中心とも近いという狀況は、近十年に日本やベトナムの學者がベトナム中・南部の古代政體について提唱しているモデルを補強するものであるように思われる。そのモデルとは、「川筋權力」（riverine polity）と呼ばれるもので、宗敎の中心（山にあることが多い）、政治中心（氾濫原にある）と港市が水路で結び附けられて、[48] 三部構成の權力を成している。[49]

これまで述べてきたことからすれば、從來考えられていたよりもっと統合的な地域世界が存在していたという想定が導かれる。大越は中國の影響下に、チャンパはインド文化圏にあり、海南島は邊境の只中にある僻地だと從來考えられてきた。三者は地理的には隣接しながら、文化的にも經濟的にも共通項をほとんど持たない、バラバラの存在とみなされてきた。しかし、近十年のベトナム中央部の考古發掘により、チャム文化にはインド文化と共に中國の強い影響があったことが明らかになってきた。それはとくにチャンパの北部に顯著である。[50] 中國の影響は部分的には直接大陸から來たものだろうが、大部分は交趾・海南から交易を通じて二次的・三次的に及んできたものであろう。[51] 逆に、チャンパの大越への影響

も、従來考えられてきたより深いものだったようである。近年ハノイの中心で見つかった李・陳・黎朝初期の王宮跡には、美術・建築面でのチャムの影響が明らかで、兩者の間に頻繁で密な交渉があったことを示している。(52)

こうしてみると、ベト―チャム間の抗争を、從來の政治・領土的角度よりむしろ海上交易の觀點から檢討することが可能になる。ホールが指摘したように、交州は唐代の二大港の一つだったので、チャム商人はここから中國製品を得ていたに違いない。十世紀のベト族の獨立は、長期にわたって固定的であったベト―チャム關係を變えるものであった。大越は政治的にチャンパと同等になっただけでなく、海上交易においても主要なライヴァルになったのである。兩者の關係に生じた出來事は、こうした商業とのからみで考えなければならない。(53) たとえば、ウィットモアは香木の爭奪が十二世紀の大越とチャンパの戰爭の一環をなしていた可能性を指摘している。(54)

三　チャンパ攻略とその遺産

この交易圈の著しい特徴の一つは、その崩壞が急だったことである。商業で賑わった地域が突然活動を停止した。ブラウンが指摘したように、大越は一五一〇年ごろに陶磁輸出を止め、以後十六世紀いっぱい、ベトナム製品は資料上に現れてこない。(55)

十四・十五世紀大越の主要輸出產業であった製陶業が突然停止した主因は、一四七一年の黎聖宗によるチャンパ都城ヴィジャヤ攻略にある。この軍事行動がチャンパの製陶業に及ぼした影響については史料に言及がある。しかし、いっそうダメージを受けたのは、チャンパのムスリム市場を志向していた大越の製陶業だったのである。ここで、中國史料がチャム人について「交易で生計を立てている」と述べていることを想起されたい。チャム―ベト間交易でもっとも利潤が上がったのは、ベトの陶磁器とチャムの香木の交換だったようである。したがって、チャム人は東南アジア群島・中東のムスリム市場と、產地ハイズオンを結ぶ役割を果たしていたことになる。この戰爭で聖宗が四萬以上のチャム人を殺戮し、三

萬以上を捕虜として連行した時、[56]王は圖らずも數千單位のベトナム職人の生計を破壞していたのだった。大越は軍事的勝利を得たものの、もっとも重要な海外市場を失ってしまった。[57]海上交易における地位を失った雲屯は以後『大越史記全書』から姿を消す。

雲屯の衰退について、今まで納得のいく説明がされてこなかった。この問題を個別に考えていては、答えは出てこない。この港の運命は、チャンパとの交易に多くを依存していた海南島と切り離せない。注目すべきは、この頃海南島の交易もまた、最重要のパートナーであるチャンパを失って衰えたことである。チャンパは十三～十五世紀の間、中國沿海とくに海南島と東南アジア間の交易の中繼地として、獨特の役割を擔ってきた。廣域交易の觀點からみると、大越のチャンパへの致命的攻擊は、トンキン灣交易の最大の誘因を消し去り、トンキン灣と東南アジア島嶼部の連係を斷ち切るものだったのである。[58]その結果、大越における交易と權力の共生的均衡が崩れて、自壞作用がもたらされた。リーバーマンにならっていえば、ベトの勝利は「甘美な毒入り果實」だったのである。[59]

チャンパのムスリムと大越の經濟關係は、一五〇八年に最後の一擊を被った。聖宗は一四七一年のヴィジャヤ攻略後、前近代の東南アジアの通例として、多くの捕虜を大越に移住させた。その一部は淸化や乂安に村落を營んだが、[60]王室を含む大部分は昇龍地方に定着した。一五〇八年、大越のチャム人が反亂を企んでいるとの噂が流れると、威穆帝は國內のチャム人の皆殺しを命じた。虐殺の命令はこの年三度發布されている。[61]

『明實錄』によれば、十五世紀からジャワ、スマトラの使節はしばしばチャンパの使節を伴っている。[62]チャンパと島嶼部の密接な關係はドゥマクの傳承にも示されている。その初代の王（在位一四八〇―一四八九）の妻の父はチャム人だったともいい、彼の母はチャンパから來た中國人だとする傳承もある。[63]大越の地からチャンパ商人が一掃されたことで、チャンパを中國・大越貿易の據點にしていたイスラーム世界の商人と大越の關係は解消されたのである。[64]

四　民族地圖の書き換え

これまでの議論を前提にすると、當時トンキン灣周邊に住んでいた民族の問題が浮上してくる。紅河デルタは大越史を通じてベト族の均質な世界であり、その點東南アジア諸國の閒では獨特であると考えられてきた。しかし、史料をみていくと、このことは十五世紀以後にしか當てはまらない。十三世紀に編纂された『越史略』によれば、十三世紀初までは海岸地帶の大部分は地方の首長の支配下にあり、彼等の一部は漢字で「獠」と記されている。これはラオ族かもしれない。とにかく、ベト族ではないことははっきりしている。[65]

この地方に「交趾蜑」と呼ばれるグループがいたことが分かっているが、これは廣東の蜑人と同じ民族である。彼等は水際に住み、魚などの海產物をもって欽州に現れ、米・布と交換した。[66] 彼らが、紅河デルタに住み、明瞭なベトナム語を話せず“tieng vung be”（海邊の言葉）を操った人々と同じ民族なのかははっきりしない。[67] こうした漁民たちの中から莫登庸が登場し、權力の座についたのである。彼はハイズオンの出だが、一說にはその祖先は廣東の蜑人だという。[68]

この地域では民族の混合が活潑に繰り返され、李・陳朝に活力を與えた。東南アジアの他地域同樣に、十四世紀半ばまで交趾の人力不足は顯著であった。すでに述べたように、中國人が奴隷として買われていたし、[69] 廣西の賊がしばしば地域住民――ヌン（中國でいう壯族）などだろう――を捕らえ、交趾に賣っていた。[70] 前掲の黎母の傳承に見られるように、ベト族と海南人の通婚も行われていた。

「商業の時代」以前、交趾は中國からの亡命・移住者にとって、最大の受け入れ先であった。たとえば南宋の末年、宋人が海船三十艘を仕立てて來附してきた記錄がある。[71] チャム、ラオ人も大越でかなりの地歩を占めており、陳朝は中國風の衣服やチャム・ラオ語を禁止する敕令を再三出している。[72]

宋代の傳承によれば、陳朝の王族は邕州からベトナムへ向かったのだという。この話によると、陳朝初代の王は福州の

長樂出身で、家產を賭博で使い果たし、邕州に流れ着いた。當地には交趾の貴族がよく交易に訪れていたが（交趾と境を接する邕州には欽州とならんで博易場が置かれていた）、彼は王の孫娘と出會い、戀に落ちて結婚したという。[73] まるで寓話のようだが、編年史書が記す陳氏の民族的出自を確認し、[74]『嶺外代答』の記事とともにベト族エリートの交易關與の事實を裏附けるものである。[75]

陳朝の王が中國起源であることは周知の事實だったし、『大越史記全書』も正直にこのことを認めている。問題は、これが從來考えられてきたように個別的・偶發的事象なのか、それとも支持者のネットワークに支えられたものなのかということである。もし後者だとすると、その支持者とはいかなる人々だったのか。陳朝の興起を助長したのが社會・政治機構の柔軟性であることは、研究者が一致して認めるところである。[76] また、東南アジアで成功する支配者は、首長や土地を基盤とするエリート同士の競合のなかから現れてくるが、それぞれの背景に支持集團が存在する。この點で、陳朝が競合勢力の中から勝ちあがっていけるだけの舞臺を、トンキン灣交易圈が提供したのかどうかを問うてみる價値があるし、じっさいその通りであったらしい。[77] 最近のベトナム人學者は、陳氏が漁業・農業を合わせた經濟的基盤の上に、王位を勝ち取ったという見解をとっている。[78] これは、農業以外の經濟要因がベトナム史の形成に作用しており、陳朝の興起に海が重要な役割を果たしたことを認めるものである。陳氏を歷史的空間のなかで改めて把えかえすと、海で生計を立てる福建人がその富を背景にして李氏の王族と結婚するという、東南アジア史通有のパターン（たとえば、十八世紀の後半シャム王となった潮州出身の鄭昭のケース）を見て取れる。また、歷史的文脈に戻してみれば、ベトナム隨一の民族英雄であり、國父と仰がれる陳國峻（陳興道）の祖先もまた中國人であることに思い當たる。[79] こうしたことはすべて、これまで封殺されてきた場所・アイデンティティへの感覺を賦活し、民族主義的歷史學による單純な色分けを錯綜したものにする。

明の占領は大越社會の性質と人口組成を考える際の分水嶺となる出來事だった。一四〇七年には紅河デルタの文武諸色の才に惠まれた九千名、そして工匠七千七百名の南京送致が命じられ、一四一三年にはさらに百三十人の職人とその家族

が徴用されている。[80] 黎利と彼の部下である清化の人々（その多くはムオンあるいは非ベト系と考えられる）が紅河デルタに定着した時に、沿海部にいた上述のラオ・タイ系などの非ベト系の人々に取って代わるか、混交したようである。大越の海岸部の人口が均質的なベト族へ組みこまれていったのは、一四二七年の一萬の中國人の殺戮、[81] そして上述のチャム人虐殺を經て、十六世紀初頭になってからのことである。

五　「商業の時代」のもう一つのエピソード？

フォーヒエン（現在のフンイエン）が大越の十七世紀の貿易據點であったことは長らく定説となっており、研究の蓄積もある。しかし、オランダ・イギリス・日本・中國人がこの港を訪れたにもかかわらず、提供される產物が限られていたこともあって、ダンゴアイ（鄭氏政權下にあった北部）社會において商業が周縁的な役割を果たすに止まっていたことを象徴する存在であったといわざるを得ない。雲屯同様、フォーヒエンの意義も、個別に考えるのでなく、他の地域との關連で見てゆく必要がある。そのために、まず日本の長崎、中國の長江デルタから探究をはじめよう。十六世紀後半から十八世紀前半にかけて、日本市場は廣域市場統合にもっとも大きな刺激を與える存在であり、長崎―寧波―フォーヒエン間の貿易が繁榮していた。

長江流域では明朝期に著しく人口が增え、十倍に達したところも多かった。[82] 人口增は手工業生產のブームを卷き起こした。十六世紀後半には、長江デルタは出版文化の中心となった。[83] 生產コストは極めて低く、百字の彫版にわずか二十文しかかからなかった。[84] 十六世紀後半に、ある士人が「科擧の勉強をしていた若いころには、刊本を使うことができなかった。……今はどこでも刊本を見ることができる。これまた世の繁榮の印である」と述べている。[85]

出版は南京・蘇州・杭州でもっとも發達したが、これら出版の中心は南京・寧波船の集荷地點でもあった。したがって、日本史料が書籍を輸出する船のほとんどは南京・寧波船だとするのも、不思議ではない。[86] のちにベトナムでもっとも有名

な韻文小説となる『キムヴァンキュウ』（原作は中國の『金雲翹傳』）は長江デルタと海岸部で起きた實話をもとにしたものだが、『舶載書目』によれば、『金雲翹傳』は日本に一七五四年に輸入されている。[87] 書籍交易は、長江デルタと日本・琉球・朝鮮、そしてダンチョン（阮氏政權下の南部）・ダンゴアイの二つの政權が形作る漢字文化圏をつなぐ重要な役割を果たしていた。

したがって、書籍貿易はこの時代のトンキン―中國―日本間の貿易の性質を照らし出してくれる。十七世紀後半にトンキンをもっとも頻繁に訪れたのが廣東・福建船よりも、寧波のジャンクであったのは面白い。『華夷變態』によれば、一六八九～一七一二年の間にベトナムを起點・中繼地として訪日した十三艘の內譯は、東京（トンキン）船四、厦門船二、泉州船一、廣東船一、寧波船五[88]である。寧波船はフォーヒエンで漢籍（書籍は免稅）を黃絹と交換してから、寧波に戻ったあと長崎に向かい、銅や銀を購入する。中國に戻ると、また積荷を準備して翌年フォーヒエンに渡る、この三角交易の繰り返しであった。[89]

出版は低コストであった。木版にはたいした金はかからず、業者は低コストで多樣な本を作ることができた。商業の繁榮、教育の普及、人口の增大が需要に拍車をかけ、價格を抑えることを可能にもした。明代中國のイタリア人宣教師マテオ・リッチ（一五五二―一六一〇）は「莫大な量の書物が、おかしいほどの廉價で賣られて出回っている」ことに驚いている。[90]

史料から判斷すると、輸出された漢籍も、ふつう安價で賣られていた。十七・十八世紀について價格を示す史料を持ち合わせていないが、二つの十九世紀の史料による漢籍と他の輸出品との價格比較から、狀況をある程度つかむことはできる。一八四五年の長崎の記錄には、經學・史學の重要な參考書――その多くは數百卷からなる――のいくつかの値段が記されている。『佩文韻府』はオランダ船がもたらした金時計よりずっと安く、オルゴール一つが『知不足齋叢書』『十三經注疏』『欽定四經』の價格にほぼ等しい。[91]

一八一三年の北ベトナム諸港での關税規定をみると、ベトナムで賣られた書籍は、日本よりもさらに安かったことが分かる（なお、この時には書籍に課税されていた）。もっとも高價なのが「古書」で一箱十九貫だが、これは鴉片玉（煙坭）二百五十グラムよりも安い。さらに安價な「通書（一般書）」は百卷でたったの五貫である。[92] これは布鞋七足、南笠（竹笠）十個、鉢場方磚（バッチャン製の瓦）二百枚の値段に等しい。[93]

中國製の文房具も安かった。四十種類の紙の價格が記されているが、紙も筆も安い。[94] 紙千枚で木の鞋一足、生豬小項（生まれたての子豚）一頭と同じ値段であり、筆百本で、赤糖餅一籠分に等しい。地元製の筆（「南筆」）が中國製の廉價品より四割高なのが目に附く。

こうした狀況がベトナムの儒教文化の物質的基盤となったのである。後黎朝のもとで都市や農村で文人階層が再び擡頭してきたのは、書籍・文具の入手が容易だったからである。[95] こうしてみると、十七世紀の北部における文人の復活は、[96] 當時長江デルタで榮えていた出版文化や、アジア貿易全般とくに書籍貿易の主動因であった日本貿易と無緣ではない。換言すれば、ベト族エリートのいわゆる「傳統的」「儒教的」「農村的」價値觀は、まさしく十六世紀後半以降の中國における大量出版に支えられていたのである。商人たちがもたらした書物が知識のストックを形成し、十八世紀の注釋學、傳記、史學の新たな發展の重要な源泉となったのである。[97]

前掲の關税規定から、書籍・文具の販賣によって中國商人が得る利潤がわずかなのは明らかである。積荷の大半が日常消費財なのも不思議ではない。十四種の錦、二十四種の緞子、九種の綾紬、六種の絹、十六種の綿織物があがっていてじつに多様だが、それだけ消費者が貧富各層に亙っていたということである。日常品の中には、東南アジアの原料が中國で加工されて輸入されたものも多かったであろう。これらの製品も非常に安かった。金物を例に取ると、錫扣（ボタン）千個が五・三貫あるいは銀一・九兩、銅馬鈴百個が二貫、潮州製の縫針一萬包が十三・五貫であった。[98] ここで強調したいのは、ベトナムの政治文化のイデオロギー的基礎を形作った儒學が、書籍交易を隨伴した日常品交易に大きく依存していた、

ということである。

このように、商業は從來考えられていたよりも具體的な形で、文化的慣行を鄉紳の世界にもたらしていたのである。ハノイ漢喃研究院の漢喃コレクション六千點のほぼ三分の一は、中國漢籍である。[99] その多くは科擧用の參考書、入門書、金言集、法律書、序文・書簡・契約文書作成のマニュアル本である。そのことは、十八世紀のトンキンで活動した西洋宣教師が使った本を見ればわかる。その書名から見て、古典の通俗版と考えられるものが含まれている。[100] これらの書物がまさしく福建內陸部や長江デルタの大量市場で生產流通した類のものであるのは興味深い。

もし、儒教文化の基底部分にも交易・市場の影響が及んでいたのであるなら、儒教に基礎を置いた大越の政治についても再考しなければならない。十八世紀半ばまで――十五世紀を例外として――權力と自立の象徵たる貨幣鑄造權は外國人の手にあった。十五世紀までは、廣東・福建商人であり、十七～十八世紀は日本・中國商人、十九世紀はマカオの掌中にあった。[101] 貨幣が海からベトナムに運ばれたことは言うまでもない。

從來のベトナム史學は、海外交易を商人・稅關吏と宮廷のみが關與するものとして描き、ベト族の歷史において貿易は周緣的な役割しか果たしてこなかったと論じる傾きがあった。このパラダイムに從うかぎり、ベトナムの過去を理解する鍵は、あいかわらず農村、農村文化、そして農村に縛られたベト族知識人ということになる。「鄉約」が農村における儒教文化を體現したものとして稱揚されてきたのも、それ故にである。現代の研究者からみれば、鄉約は農民の價値觀――土地・村落との絆、嚴格な社會秩序――を表わすものということになる。

しかし、陸地に縛られた知識人が考案した鄉約のモデルは、皮肉にも海の向こうからきたものであった。現存の鄉約五千點のなかで、洪德年間（一四七〇―一四九七）に編纂されたとされるものが一點あるのを除くと、初期の鄉約はすべて十七世紀それも後半につくられていることが重要である。[102] 嶋尾稔の指摘によれば、鄉約が競って編纂されたのは景治～正和年間（一六六三―一六九〇）で、場所は儒學の先進地域であった。[103] この動きが十七世紀の廣東・福建での鄉約の流行や漢籍

の輸入とどの程度かかわっているのか、今のところ不明である。しかし、「陸・官・農」と「海・民・商」がベト史の兩極を成し、その間に溝が存在するという史觀を再考すべき時點にきているのではないだろうか。兩者は密接にかかわり、相互に依存しあい、さらには互いに養分を與え合ったとさえ言えそうである。

さらに興味深いのは、鄕約の編集キャンペーンが始まった背景である。十七世紀の福建・廣東では、村落統合への動きは、往々にして山間地や新開の砂地をめぐる農村同士の頻繁な爭いへの對應であった。換言すれば、他村との爭いにおいて示される力こそが、村民の生活を左右したのである。[105] 鄕約はこうした狀況の中で作られた。その目的は有力戶の利害を調整すること、指導層による社會經濟活動への介入・統制、資源の再配分を可能にする拘束規定を成文化することであった。このような村落は高度に發展した政治・經濟文化によって生產され、近隣の同樣の村落との競合關係の中で加工されていったものであって、決して「自生的な」「自立した」ものではない。村落統合への動機が內部よりむしろ外部にあったことは、大村の多くが山賊や海賊を防ぐために獨自の武力（鄕兵・土兵）を有していた事實に徵して明らかである。こうした狀況は、西山黨が北部に侵入した十八世紀後半のタイビン・ナムディンの海岸地方の領主たちの間にも見られたものであった。[106] 村落共同體が閉鎖性を增していったのは、十七世紀の後半に陶磁器や絹などの代表的な輸出產業が不振となり、[107] 北部の富と都市的領域が減退したことを反映するものであると言ってよかろう。

本稿では貿易と海域を中心に論じてきたが、それこそがベトナム理解の鍵なのだと言うつもりはない。海からの視點は、あくまで陸からの視點を補完するものに過ぎないが、過去をバランスよく描くことを可能にする。海からの眺望は、「儒教・村落・傳統」のセットを前提とし、商業をその對極に置く見解を根底から問い直す手がかりとなるだろう。また、國家の基礎をなす地域的力學が、國家の物語に覆われた結果いかに見えにくくなってしまっているかを示すものでもある。そして、その先には、諸時代のエリートの利害にあわせて仕立てられたイデオロギーの拘束服に過去をくるみ込むのでなく、變化の相においてダイナミックかつ複合的に過去を理解する道が開けてくるだろう。

註

（1）こうした見方を體系的に見直し、初期大越を南シナ海の交易ネットワークに位置づけようとしたものとして、Momoki Shiro 桃木至朗、“Dai Viet and the South China Sea Trade from the 10th to the 15th Century”, *Crossroads* 12-1 (1998), pp.1-34 がある。最近のベトナムを海から見たすぐれたものに、Christopher Goscha, “The Maritime Nature of the Wars for Vietnam (1945-75)”, 4th Triennial Vietnam Symposium, Vietnam Center Texas Tech University, pp.11-13, April 2002 がある。

（2）Nola Cooke and Li Tana, eds., *Water Frontier. Commerce and the Chinese in the Lower Mekong Region, 1750-1880* (Lanham: Rowman and Littlefield, 2004).

（3）明・劉誼『平黎記』（韓振華『諸蕃志注補』、香港大學出版社、二〇〇〇、四五九頁所引による）。

（4）「占城に產する沈香は眞臘に及ばず、眞臘產のものは海南の黎峒に及ばない。黎峒の中でも萬安黎母山の東峒のものが天下に冠絕している」（明・周嘉胄『香乘』引『鐵圍山叢談』）。『香乘』は十七世紀前半の作で『四庫全書』子部に收錄されている（四庫藝術叢書『錢錄外十五種』、上海古籍出版社、一九九一、三五六頁）。

（5）清・屈大均『廣東新語』卷八「黎母」（中華書局、一九八五、二七一頁）。ベトナム北部、中部（當時はチャンパ）の沈香の產地を明示するベトナム史料はいまのところ未見である。『諸蕃志』は「交趾」の項に土產として沈香を擧げているが、「沈香」の項では、產地として眞臘、占城、三佛齊、闍婆を擧げるのみである。

（6）前掲『諸蕃志注補』四四三頁。宋代、海南の香木はしばしば牛と交換され、牛一頭につき、香木一擔（六十キロ）だったという（范成大『桂海虞衡志』）。

（7）宋・周去非『嶺外代答』卷五「欽州博易場」（一一八一年序撰。中華書局、一九九七、一九六―一九七頁）。

（8）『諸蕃志注補』三頁。

（9）Momoki, “Dai Viet and the South China Sea Trade”, p.12. 今日までバクロンヴィー島（トンキン灣上にある。ハイフォンと海南の中間に位置）に住む海南人社會ではベトナム語が話され、ベトナム中部と交易を續けている。かつてベトナム中部で活動していた海南人は、寶石、シナモン、燕巢、虎皮、象牙を遠く內陸のラオスから買い附けていた（Goscha, “The Maritime Nature of the Wars for Vietnam”, p.6）。

（10）『明實錄』一四二九、一四三七、一四四七、一四四九、一四六三、一四七一、一四八〇、一五〇四、一五一八年の各條。

（11）Pierre-Yves Manguin, “Études cam II L’introduction de l’Islam au Campā”, *BEFEO*, vol. 46 (1979), p.256.

（12）これらの商人がペルシア、アラブ商人とどの程度切り離して考えられるかは明らかでない。

（13）崖州には二つの蕃坊があった（『（乾隆）崖州志』卷八・

風土志、故宮珍本叢刊第一九四册、二〇〇一、一三六頁）。『古今圖書集成』職方典卷一三八〇瓊州府風俗考・崖州に「この地方の人はもともと占城の出である。宋・元の戰亂時に家族を連れて船でやってきて海岸に住みついた。〔その居住區は〕「番邨」「番浦」と呼ばれる。今の編戶はみなその子孫である」とある。

（14） Roderich Ptak, “Hainan’s Position in Maritime Trade, c.1000 to 1550” in Geoff Wade, *China and Southeast Asia: Historical Interactions* (Singapore: National University of Singapore Press, forthcoming)

（15） 羅香林『蒲壽庚傳』（臺北、中華文化出版事業委員會、一九六五）二一二頁。

（16） Manguin, “L’introduction”, p.260.

（17） Chang Pin-tsun, “The Formation of a Maritime Convention in Minnan (Southern Fujian), c.900-1200” in *From the Mediterranean to the China Sea: Miscellaneous Notes*, eds. Claude Guillot, Denys Lombard and Roderich Ptak (Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 1998) プタク前掲註（14）論文より引用。

（18） Ptak, “Hainan’s Position in Maritime Trade”. チャンパと大越北部の間に位置する又安もまた、チャンパや海南と密接な關係を持っていたようである。前掲註（9）で述べたごとく、海南島のジャンク船商人は長らく中央ベトナムとのシナモン交易に關わっていたが、彼らのネットワークは又安を通してラオスへと伸びていた（Christopher Goscha, “The Borders of Vietnam’s Early Wartime Trade with Southern China: A Contemporary Perspective”, *Asian Survey*, vol.40, no.6, 2000, pp.990-992.）

（19） 黎貴惇『芸臺類語』卷三（Saigon: Phủ quốc vụ khanh đặc trách văn hóa, 1972, pp.32a-32b）。『廣東新語』卷二「銅柱界」（中華書局本、四二頁）。

（20） 馮先銘『中國古陶瓷文獻集釋』卷一（臺北、藝術家、二〇〇〇、一四二頁）。

（21） 『嶺外代答』卷七「生金」（中華書局本、二七〇頁）。

（22） Ian Mabbett, “Buddhism in Champa” in *Southeast Asia in the 9th to 14th Centuries*, eds. David G. Marr and Milner (Research School of Pacific Studies, ANU/ISEAS, Singapore, 1986), p.293.

（23） Kenneth R. Hall, *Maritime Trade and State Development in Early Southeast Asia* (Honolulu: University of Hawaii Press, 1985), pp.320-321.

（24） Đào Duy Anh, *Đât nu’ớc Việt Nam qua các đờ’i*〔『歴代のベトナム國土』〕(Hanoi: khoa học, 1964), p.37.

（25） Mark Elvin, *The Pattern of the Chinese Past* (Stanford U. P., 1973).

（26） Victor Lieberman, *Strange Parallels: Southeast Asia in Global Context, c.800-1830, vol. 1: Integration on the Mainland* (Cambridge U.P., 2003), p.368.

（27） Roxanna M. Brown, *The Ceramics of South-East Asia* (Oxford U.P., 1988), pp.28-29, John Stevenson and John

Guy, *Vietnamese Ceramics: A Separate Tradition* (Chicago: Art Media Resources, with Avery Press, 1997), p.54. これらの染付は元・明の染付とともにトプカプ宮殿のコレクションに現存しており、コレクションのかなりの部分を占めている。

（28） 前註参照。

（29） Yoji Aoyagi 青柳洋治 and Gakuji Hasebe 長谷部樂爾 eds. *Champa Ceramics Production and Trade-Excavation Report of the GòSành Kiln Sites in Central Vietnam* (Tokyo: The Study Group of GòSành Kiln Sites in Central Vietnam, Tokyo University of Foreign Studies, 2002), pp.8-9. この重要な文献については桃木至朗教授の示教を得た。記して感謝する。

（30） Brown, *The Ceramics of South-East Asia*, p.23.

（31） *Vietnamese Ceramics*, p.58.

（32） Ho Chuimei, ed. 1996, *ACRO Update* (Chicago), nos. 1, p.3 (*Vietnamese Ceramics*, p.56 より引用)

（33） Geoff Wade, "On the Possible Cham Origin of the Philippine Scripts", *Journal of Southeast Asian Studies* 24-1 (1993), pp.44-87.

（34） Nguyễn Thừa Hỷ, *Thăng Long-Hà Nội, thế kỷ XVII-XVIII-XIX*〔『十七～十九世紀のタンロン—ハノイ』〕(Hanoi: Hội sử học Việt Nam, 1993), pp.230-248. また、*Tuyển tập văn bia Hà Nội*〔『ハノイ碑刻集』〕所収の、ハンダオ通りに拠点をおいたハイスオン出身商人の碑文（「ハンダオ通りのテイン・ホアロック」）を参照（Hanoi: Nhà xuất bản khoa học xa hoi, 1978. vol. 2, pp.60-63; 146-148）。

（35） Nguyễn Vinh Phúc and Trần Huy Bá, *Đường phố Hà Nội*〔『ハノイの街』〕(Hanoi: Nhà xuất bản Hà Nội, 1979), pp.135-139, 176.

（36） 二〇〇四年四月二十日のベトナムテレビ・チャンネル3のレポートによる。

（37） *Lịch sử Việt Nam*〔『ベトナムの歴史』〕(Hanoi: khoa học xã hội, 1971) の漢譯『越南歴史』（北京人民出版社、一九七七）一一一頁。

（38） 賀熙齡等『(道光) 浮梁縣志』（『中國近代手工業資料』第一巻、三聯書店、一九五七、十九～二四頁）。

（39） 明代、製陶の都であった景德鎮では日夜數千の労働者が働いていた。

（40） Đỗ Văn Ninh, *Huyện đảo Vân Đồn*〔『雲屯島』〕(Vân Đồn: Uỷ ban nhân dân Huyện, 1997), pp.177-199.

（41） ホイアン沖のクーラオチャムで見つかった陶磁器はチューダウから川舟でトンキン灣の雲屯などの港に運ばれ、洋行のジャンク船に積み込まれたものだと考えられている。*A Sunk Ship at Hoi An: Treasures from the Hoi An Hoard* (Butterfield, 2000), p.X.

（42） Momoki, "Dai Viet and the China Sea Trade ", pp.2-3.

（43） Kishimoto Mio 岸本美緒、"The Nanhai trade and the structure of the Qing economy during the 18th century", in *International Association of Historians of Asia 13th Con-*

ference, 1994, p.2.

(44) Hà Văn Tấn, Nguyễn Văn Kự, and Phạm Ngọc Long, *Chùa Việt Nam; Buddhist Temples* (Hanoi: Nhà xuất bản khoa học xã hội, 1993), pp.206-219.

(45) 前註書、一一〇頁。一三二九年の一年だけで陳朝の貴族は千三百、一三二四年には千體もの佛像を鑄造している。Hà Văn Tấn ed. *Khảo cổ học Việt Nam*〔『ベトナムの考古學』〕, vol. 3 (Hanoi: Nhà xuất bản khoa học xã hội, 2002), p.150.

(46) 『大越史記全書』本紀卷六（陳荆和校合本、東京大學東洋文化研究所、一九八四）一五〇頁。

(47) 黎崱『安南志略』卷一（一三三三年序撰。中華書局、二〇〇〇、一九頁）。

(48) クアンナム省・トゥーボン河流域のミーソン（聖地）とチャーキュウ（政治中樞）とホイアン（港市）、南部・ドンナイ河流域のカッティエン遺跡（ラムドン省の聖地）とタンケン遺跡（ビエンホア省の城市）とカンゾー遺跡（ホーチミン市に屬する港市）の關係がそうである。

(49) Momoki Shiro, "A Short Introduction to Champa Studies", in *The Dry Areas in Southeast Asia: Harsh or Benign Environment?*, ed. Fukui Hayao 福井捷朗 (Kyoto: Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 1999), p.70.

(50) 私は一九九八年に、福井捷朗が組織した東南アジア乾燥地域調査團に隨行し、ベトナム中部のフィールド調査での知見を得た。こうした機會を與えてくれた福井教授に感謝するとともに、この問題について示唆を與えてくれた桃木至朗、グエン・ティエン・ドンの兩氏にも謝意を表する。

(51) 逆に、ベト朝廷でもインド風の神・儀式に注意を拂っていたことについては、Lieberman, *Strange Parallels*, p.357.

(52) 二〇〇四年五月に當地を訪問する機會を與えてくれたベトナム社會科學院に感謝する。

(53) Kenneth Hall, *Maritime Trade and State Development*, pp.183-184. John Whitmore, "Elephants can actually swim" in *Southeast Asia in the 9th to 14th Centuries*, p.130.

(54) Whitmore, "Elephants", p.131.

(55) ベトナムの沈船陶磁は主に二期に分かれる。一三七〇—一四三〇年頃と一四六〇—一五一〇年頃である。Roxanna M. Brown, "Ming Gap? Data from Shipwreck Cargoes", paper for the workshop "15th century China-Southeast Asia", Asia Research Institute, Singapore, 17-19 July, 2003.

(56) 『大越史記全書』本紀卷十二、六八四頁。

(57) 十六世紀後半以降、國内の市場は主に、複雜な形狀の、粗い繪附けを施した燭臺や香爐を寺院に供給するものとなった。*Vietnamese Ceramics*, p.154.

(58) 十七世紀にオランダがアジア交易に參入するまでこうした狀況が續く。十七世紀には、多くの粗製陶磁器がトンキンから輸出されたが、これは製品の樣式と市場が變化したことを示している。

（59） Lieberman, *Strange Parallels*, p.394.

（60） 桃木氏の示教による。

（61） 『大越史記全書』本紀巻十四、七八六～七八七頁。

（62） Anthony Reid, “Flows and Seepages in the Long-term Chinese Interaction with Southeast Asia”, in *Sojourners and Settlers: Histories of Southeast Asia and the Chinese* (Sydney: Allen and Unwin, 1996), pp.15-50.

（63） Momoki, “A Short Introduction”, p.71; Anthony Reid, *Southeast Asia in the Age of Commerce*, vol. 2 (New Haven & London: Yale U.P., 1993), p.335.

（64） パーンドゥランガで見つかった十一世紀の二つのアラビア文字クーフィー體の碑文により外國商人の存在が確かめられる。うち一つは、コミュニティを代表してチャム當局との折衝にあたる長の任命を記錄している。P. Ravaisse, “Deux inscriptions coufiques du Čampa”, *Journal Asiatique*, XI serie, tome 20 no. 2 (1922), pp.247-289.

（65） そうした地域は今日のナムディン、ニンビン、フンイェンの間にある。大黄（ナムディンの西、ニンビンの北）については、『越史略』巻三（叢書集成初編本）五一頁を、藤州・快州については六一～六三頁を參照。これらの位置については、Đào Duy Anh, *Đất Nu'ớ'c*, p.93.

（66） 『嶺外代答』一九六頁。毛奇齡は、中國の蜑はもともと交趾出自だとする（『蠻司合誌』巻十五、四庫全書存目叢書、史部二二七册、六九八頁）。

（67） Vũ Tụ' Lập, Đàm Trung Phu'ò'ng, Ngô Đú'c Thịnh, Tô Ngọc Thanh, Đinh Thị Hoàng Uyên, *Văn hóa và cu' dân đồng bằng sông Hồng*〔『紅河デルタの文化と住民』〕(Hanoi: Nhà xuất bản khoa học xã hội, 1991), p.160.

（68） 嚴從簡『殊域周咨錄』巻六（一五七四年序刊。中華書局、一九九三、二三三頁）。

（69） 註（21）參照。

（70） 『建炎以來繫年要錄』巻六九、紹興三年十月戊戌條（『古代中越關係史資料選編』、北京、中國社會科學出版社、一九八二、二四二～二四三頁より引用）。

（71） 『大越史記全書』本紀巻五、二四八頁。

（72） 『大越史記全書』本紀巻七、四四六頁。Lieberman, *Strange Parallels*, p.362.

（73） 『齊東野語』巻一九「安南國王」（『古代中越關係史資料選編』、一八七～一八八頁）。

（74） 『大越史記全書』本紀巻五、二二一頁。

（75） 編年史書は陳朝の始祖を福建の出とするが、初代の王陳太宗はそこから四世代下る（前註參照）。

（76） Whitmore, “Elephants”, p.131.

（77） 「陳朝が地域交易や中國人との關係を背景に擡頭してきたと考えて何ら不思議はない。（中略）陳朝は王族との婚姻を通じて首都への道を切り開いたのである」(Whitmore, “Elephants”, p.131)。

（78） Viện sử' học, *Lịch sử' Việt Nam thế kỷ X-đầu thế kỷ XV*〔『十～十五世紀前半のベトナム史』〕(Hanoi: Nhà xuất bản khoa học xã hội, 2002), pp.212-213.

(79) 「八月には父（チャン・フンダオ）に、三月には母（リウハイン＝柳杏公主という女神）にお供えをしろ」という民謠がある。

(80) 『明太宗實錄』卷七二・永樂五年九月條、卷七三・同十月條、卷一四〇・永樂十一年五月條。

(81) 『大越史記全書』本紀卷一〇、三五四頁。

(82) 傅衣凌『明清時代商人及商業資本』（北京、人民出版社、一九五六）一九頁。

(83) そのころ、出版業の中心福建は斜陽に向かっていた。

(84) 葉德輝『書林清話』卷七（謝國楨『明代社會經濟史料選編』、福建人民出版社、一九八〇、上卷三二七頁）。

(85) 李詡『戒庵老人漫筆』卷八（『明代社會經濟史料選編』上卷、三三三頁）。

(86) 大庭脩『江戸時代日中祕話』（徐世虹譯、中華書局、一九八六）六一頁〔原著『江戸時代の日中祕話』、東方書店、一九八〇、八五頁〕。

(87) 大庭脩編『舶載書目』（關西大學東西文化研究所、一九七二）下「寶曆甲戌年九番船持渡小說三十部之扣」。

(88) 『華夷變態』（東洋文庫、一九五八・五九）中、下册。

(89) 一六九八（元祿十一）年に長崎に來た寧波船の積荷一覽から、この三角交易の性格をうかがうことができる。中國の種々の絹の他に、トンキン生糸（東京糸）、絹織物（東京繻、東京紬）、大量のシナモン（東京肉桂）などから成っていて、書籍六十箱もリストにあがっている。大庭脩『江戸時代中國典籍流播日本之研究』（戚印平、王勇、王寶平譯、杭州大學出版社、一九九八）三六―三七頁〔原著『江戸時代における唐船持渡書の研究』、關西大學東西學術研究所、一九六七、一三―一九頁〕。

(90) Louis Gallagher, ed. and trans, *China in the Sixteenth Century: The Journals of Matthew Ricci, 1583-1610* (New York: Random House, 1967), p.21; Timothy Brook, *The Confusions of Pleasure: Commerce and Culture in Ming China* (Berkley and Los Angeles: University of California Press, 1998), pp.168-169.

(91) 大庭『江戸時代日中祕話』五八―五九頁〔原著、八一頁〕。

(92) 五貫は銀一・八兩。一八一三年の銀・錢比價は十兩：二八貫。『大南寔錄正編』第一紀・卷四六（慶應義塾大學言語文化研究所編、第三册、一三九頁）。

(93) 『巡司稅例』（寫本、ハノイ漢喃研究院、架藏番號 A. 978）二八頁。

(94) 墨十斤（二・五キロ）が八～十三貫。これだけあれば一生とはいわぬまでも數年もつ。

(95) マクヘイルによれば、ベトナムの識字率は二十世紀初のフランスよりずっと高かった。Shawn McHale, *Confucianism, Communism, and Buddhism in the Making of Modern Vietnam* (Honolulu: University of Hawaii Press, 2004).

(96) Keith Taylor, “The Literati Revival in Seventeenth-century Vietnam”, *Journal of Southeast Asian Studies*, vol.

18 no. 1 (1987) pp.1-23.

（97） Lieberman, *Strange Parallels*, pp.404-405.

（98） 『巡司税例』四六頁。

（99） *Catalogues des livres en Han Nom* (Hanoi: Nhà xuất bản khoa học xã hội, 1993), vol. 1, p.23.

（100） 官教師が擧げている本の題名には、『禮經』『程子』『春秋』『家禮』『孔子家語』『老子』『搜神記』『太平均書』『太平道學』（太平經？）『文林廣』『易經』『通鑑』『通論』『心燈』などがある。*Opusculum de Sectis apud Sineneses et Tunkineses* (*A Small Treatise on the Sects among the Chinese and Tongkingese*)*: A Study of Religion in China and North Vietnam in the 18th Century*, by Father Adriano di Thecla, tran. and annotated by Olga Dror (Ithaca: Cornell Southeast Asia Program, 2002).

（101） 「十五世紀まで流通貨幣のほとんどは廣東・廣西・福建で鑄造され、ジャンク船で直接安南に運ばれた。輸入された貨幣は通常の中國貨幣より小さかった」(Toda, E., "Annam and its Minor Currency", *Journal of the North-China Branch of the Royal Asiatic Society*, 17, no.1 (1882), pp.65-66, 79-80)。十七・十八世紀のダンチョンでの鑄造については、Li Tana, *Nguyễn Cochinchina: Southern Vietnam in the Seventeenth and Eighteenth Centuries* (Ithaca: SEAP, Cornell, 1997) chapter 4.

（102） この點で示唆を與えてくれた嶋尾稔氏に感謝する。

（103） 嶋尾氏の示教による。

（104） 廣東とベトナム北部の村落とエラルキーには顯著な類似が認められる。梁啓超『中國文化史』（臺灣中華書局、一九六二、五七―六〇頁）と、Đào Duy Anh の *Việt-Nam văn hóa sử cương*〔『越南文化史綱』〕を比較されたい。

（105） 楊國楨・陳志平「明清福建土堡補論」（傅衣淩・楊國禎『明清福建社會與鄉村經濟』、厦門大學出版社、一九八七）二〇―二三頁。

（106） 詳しくは『皇黎一統志』を參照。

（107） 桃木至朗はトンキン灣の交易に致命傷が與えられたのは十七世紀後半で、それは「十七世紀の危機」の一環であったことを示唆している。"Japan and Vietnam in the Asian Trade System in the 17th-18th Centuries" in *Pho Hien: the center of international commerce in the XVII - XVIII centuries* (Hanoi: The Gioi publishers, 1994) pp.39-49.

tonese pirates, insured the safety of Western trading vessels that plied the treaty ports, and promoted the concentration of previously dispersed trade into the treaty ports. This was then expanded to other treaty ports. As a result, by using the British Navy, the Qing Government was able to subdue Fujian pirates, and later suppress Cantonese pirates and achieve a revival of order in coastal areas. It appears that by using the British Navy, the Qing Government was able to firmly revive coastal order and incur a financial burden smaller than that which would have been required to co-opt Chinese pirates on its own.

A VIEW FROM THE SEA: THE NORTHERN VIETNAMESE COAST IN A REGIONAL CONTEXT

LI Tana

For too long Vietnam has been regarded as a land based polity amongst the mainland Southeast Asian countries, and as a series of autonomous villages located on the plain, with only simple exchanges in village markets and having little to do with either the mountains or the sea. This agrarian society provided the perfect environment for Confucianism, which melted into its soil and formed an integral part of Vietnam's social fabric. This article challenges the perceived image of "traditional" Vietnam by viewing Vietnamese history from the sea, suggesting that a trading zone existed in the Gulf of Tongking area from the 12th to the 15th centuries and arguing that commerce and the mixing of peoples of this trading zone formed a crucial part of the foundation of the early Vietnamese states.

This sea view allows the author to revisit the historical connections between Dai Viet, Champa, and Hainan Island. Scholars have presented Dai Viet as an entity under Chinese influence, Champa as one sharing Indian culture, and Hainan as a remote backwater in the middle of nowhere. Although located next to each other physically, the three have been seen as isolated localities that shared little, whether culturally or economically. Recent scholarship of the last few decades and the historical evidence this article tries to draw together, suggest a much more integrated region than previously perceived. Such a sea view also reveals a different map of ethnicity around the Gulf of Tongking area, in which the non-Viet, the Chams and the Chinese, all played an important part in making its history and added vitality to this region. These traces were eradicated both by tide and time, and by the prejudices of later Confucian historians, whose skepticism towards

trade coloured Vietnamese historiography. Muslim connections would have suffered the most from this cleansing, in the construction of a national story. This Muslim connection was however the lifeline of porcelain production, Dai Viet's leading export industry of the 14th and 15th centuries. Lê Thánh Tông's 1471 attack on Champa destroyed the key link between Dai Viet and the Archipelagic and Middle Eastern Muslim markets, which Cham merchants used to serve, and thus directly caused the decline of Dai Viet's ceramic production and its main port, Vân Đồn. Another episode this article examines briefly is the 17th century triangular trade between Nagasaki, Ningpo and Phố Hiến, highlighted by the book trade. It argues that Confucian learning, which formed the ideological foundation of Vietnamese statecraft and political culture, was in fact heavily subsidised by commerce in other merchandise.